

### 第十三話 蔡章猷氏のこと

台北天文台に勤めていた天文学者の蔡章猷氏がお亡くなりになったとの報に接したのは、つい一ヶ月ほど前（二〇〇九年四月）のことです。

率直に言って私は蔡氏のごことは、余り良く知りませんが、ここで改めてご冥福をお祈りしながら、思い出を辿ってみました。

あれは今から二十年ほど前になるでしょうか、台湾から蔡氏が来て、日本の天文台を視察している、との情報が五藤光学から寄せられました。

何でも台北の天文台に大きな反射望遠鏡を入れるとか言うことで、我々の芸西天文台にもやって来られました。五藤光学の留子夫人によると、戦時中は日本軍の憲兵だったそうで、温厚な人柄の中にも、なにか眼の鋭さに、それを感じました。

蔡氏は我々の東亜天文学会の会員で、私の発行する「コミットブレテン」を暫らく購読して居られました。芸西天文台

で面会したとき、彗星のパトロールもやってみたいと、意欲を示していました。OAAの創始者で初代会長の山本一清博士が一九二八年、山崎正光氏によって「クロムメリン彗星」が発見されたとき、それを追って台北まで出張されました。其のとき天文台で出迎えたのが、この蔡氏であったと言われていますが、定かではありません。それ以来山本博士と親交が出来、南からの貴重な観測記録を山本氏の所へ送り、当時の「田上天文速報」を賑わしていました。

田上（たなかみ）速報と言うのは一九四八年頃から田上天文台の台長だった山本博士が発行していた、手書きの天文ニュースで、後の「山本速報」です。

当時は日英二本立てで書かれ、内外に約一〇〇通が発行されていました。台北天文台での観測の記事は度々紙面に紹介されていました。今思い出すと一九五五年ごろ、不思議な天体を見た報告が掲載されたことを改めて思い起こします。時は正に春たけなわの頃、夕刻の頭上に大熊座の北斗七星が大きくかかって、それを見ていた蔡氏は異様な光物が飛んでいるのを発見して、山本氏に報告してきました。其の光物と

いうのはゆっくりと、まるで大熊座を取り巻くように何回か回って消えたそうです。彼のスケッチが山本速報に発表されましたが、その運動は大きな四角形でした。無論人工衛星も無い時代で、飛行機や流星でないとすると・・・？ 蔡氏は報告の最後に「これはアメリカのアダムスキーの唱える『空飛ぶ円盤』の類であろうか・・・」と述べています。

前回には、あの冥王星の発見者のトンボー氏がそれを信じる話をしましたが、蔡さんも、それ以来UFOというものを信じていたのでしょうか？しかし当のアダムスキー氏は、終の床の中で、側近者の質問に答え、それを否定したことは、その後伝えられた通りです。